

20.10.19 木村

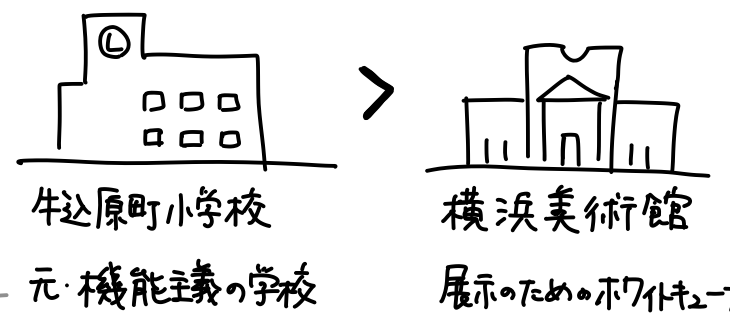
・原、ぱと遊園地 (と野原)



地形を読みとりつつ、遊び方が予め遊び方を自分で見て、作っていく。遊園地は人の行為を規定してしまう。(遊園地は演出されている) 野原は想像をかきたてるきっかけがなく、創造力が必要。

→ 遊園地は人の行為を規定してしまう。(遊園地は演出されている)
 → 原、ぱにある「自由」の感覚が大切。
 「いつでも、この空間と別のあり方に変えることができる」(15)

・2つの美術館



元・機能主義の学校 → 空間の規定力と人の行為の対等
 展示のためのホワイトキューブ → 空間が人の行為に先回りしている。

「いたれりつくせり」は良くない
 ・住む人の気持ちとそこに拘束してしまう。(13)
 ・一見自由に見えても、その自由は見えない檻の中。(15)

・ルールのオーバードライブ

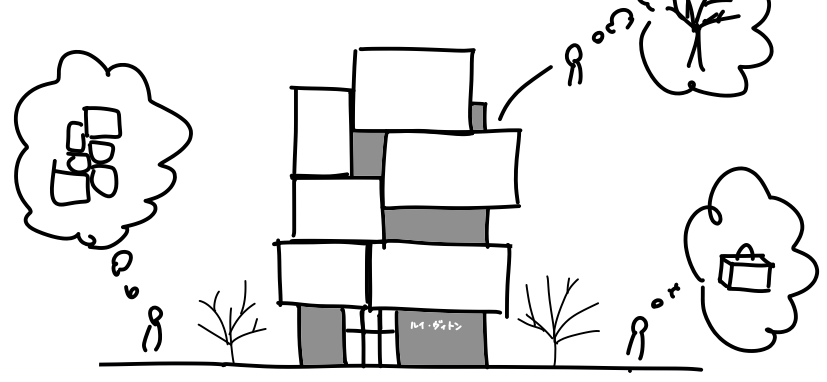
人の行為や感じ方から空間を構成すると、「遊園地」になる。
 → これらに依らない幾何的ルールのオーバードライブ(暴走)
 ⚠️ ただし、人間の行為(=プログラム)や感じ方から全く独立してルールを設定も運用も出来ないことは認めている。

関東大震災(1923)後の復興住宅、RC造り先進的な計画・意匠
 ・同潤会青山アパートメント → 現・表参道ヒルズ

集合住宅 → ギャラリー・アトリエ・店

空間の質に合わせて、機能が発生 = 「文化」
 人とモノ(空間)が感じあう、成熟した関係。

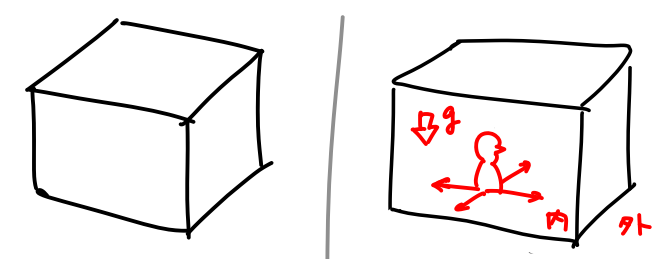
・LOUIS VUITTON 表参道



ひとつの存在がさまざまな読みとり方を許し、逆にそれによるさまざまな相の集合がひとつの存在をつくる。(30)

数学的空間と〈体験されている空間〉

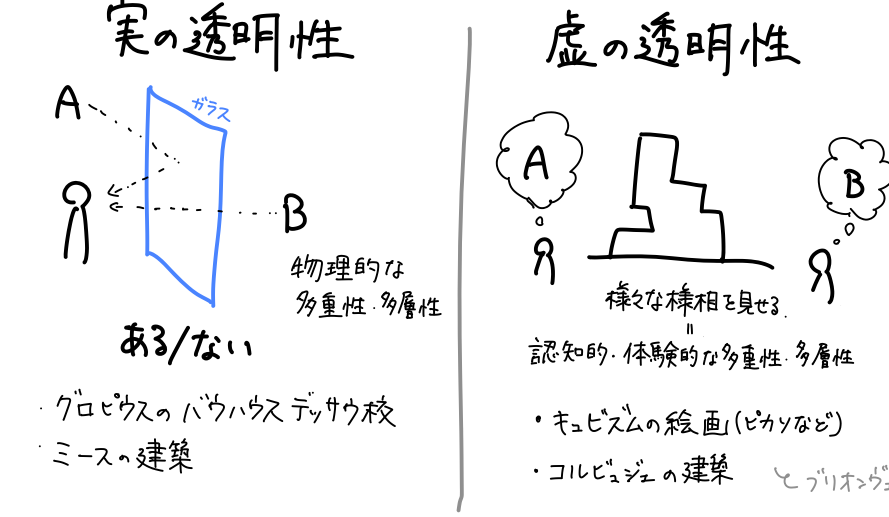
→ 『人間と空間』 R.O.F. ポリウ



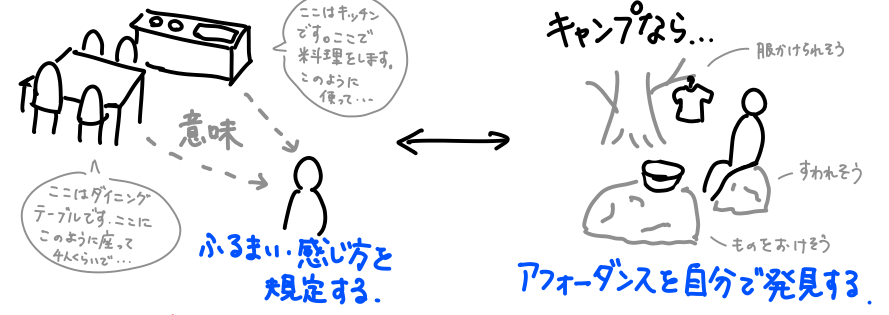
・等質性
 ・内的分節もない
 ・身体に基づいて意味づけられている。

〈体験されている空間〉は内的なイメージではなく、実在するモノを私達が捉える仕方

リテラルな透明性とフェイクな透明性
 「透明性-虚と実」 R. コーリン・ロウ = 多相性 (1964)

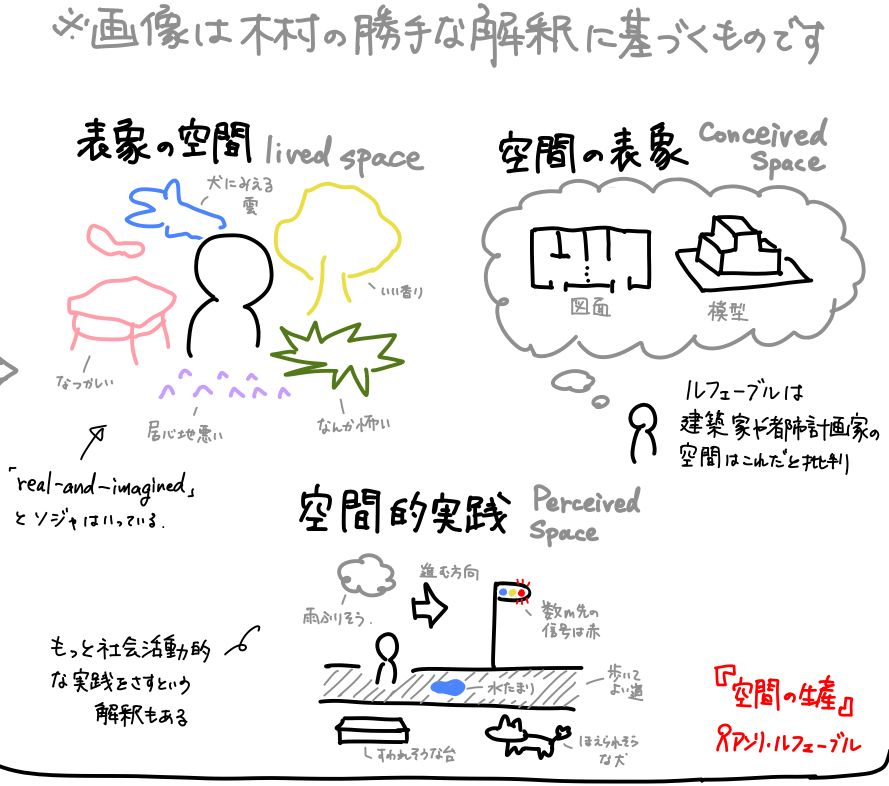


・事物の意味とその拘束力・規定力



⚠️ ただし、意味の解体みたいなテーマこそ、かえって設計者の自己満的なおしつけになり得るので要注意。

⊕α ルフェーブルの空間の三元弁証法

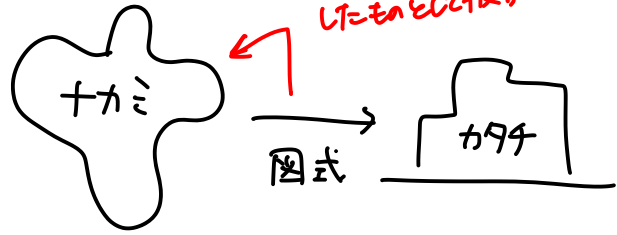


・生活は機能に分解できない。

「近代的な思考というのは、生活という不定形なものを、つとめて意図という十で切り分けようとする。言語化しやすいからである。意図を持って行動する人間。これが僕たちが暗黙のうちに了解している人間像なのではないか。」 (138)

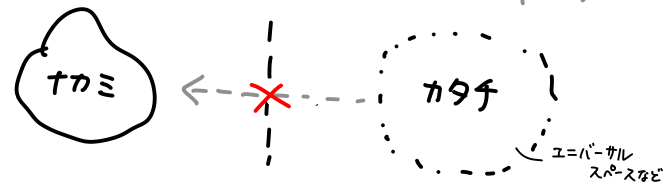
・十カミとカタチ

縦糸 図式化あるとき十カミを石壁直したものと根っこしよう。



十カミからカタチが導かれた、というのは不誠実なのではないか。(→遊園地化)

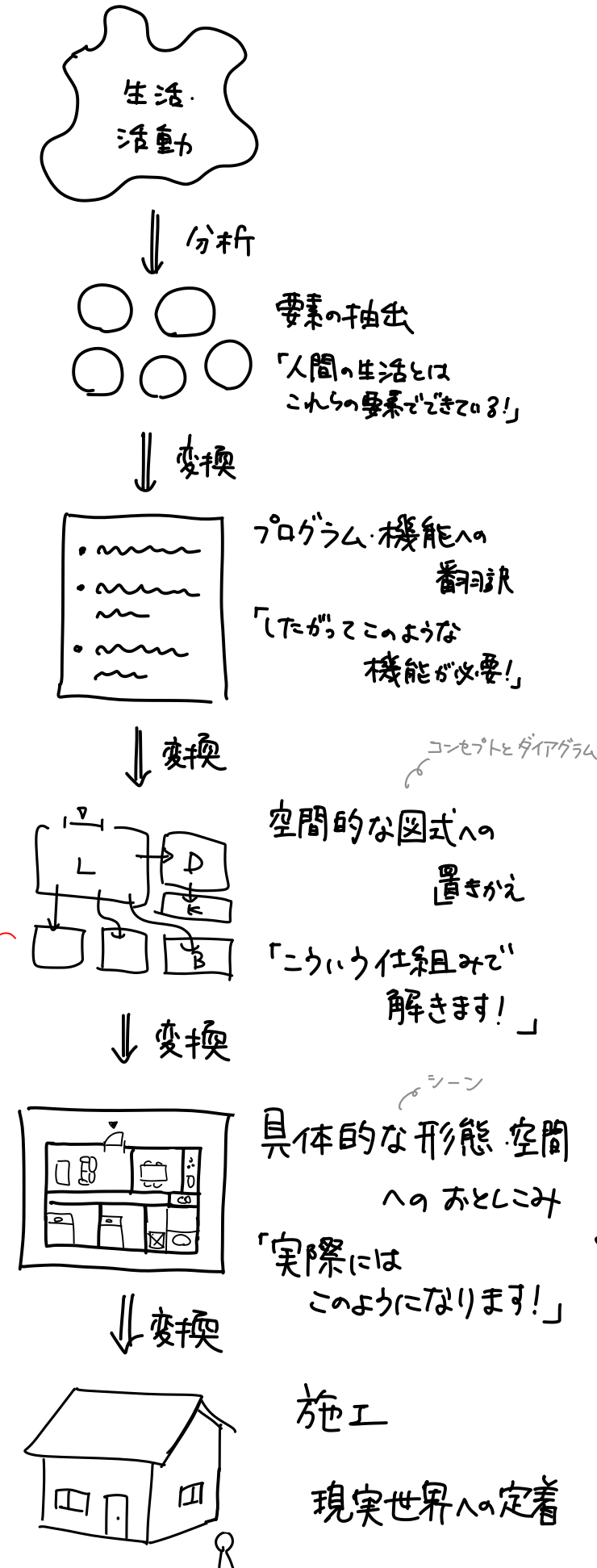
かといって何も規定しないことは、十カミの質や機能を担保できない。(→野原化)



図式を説明するための建築になるな!

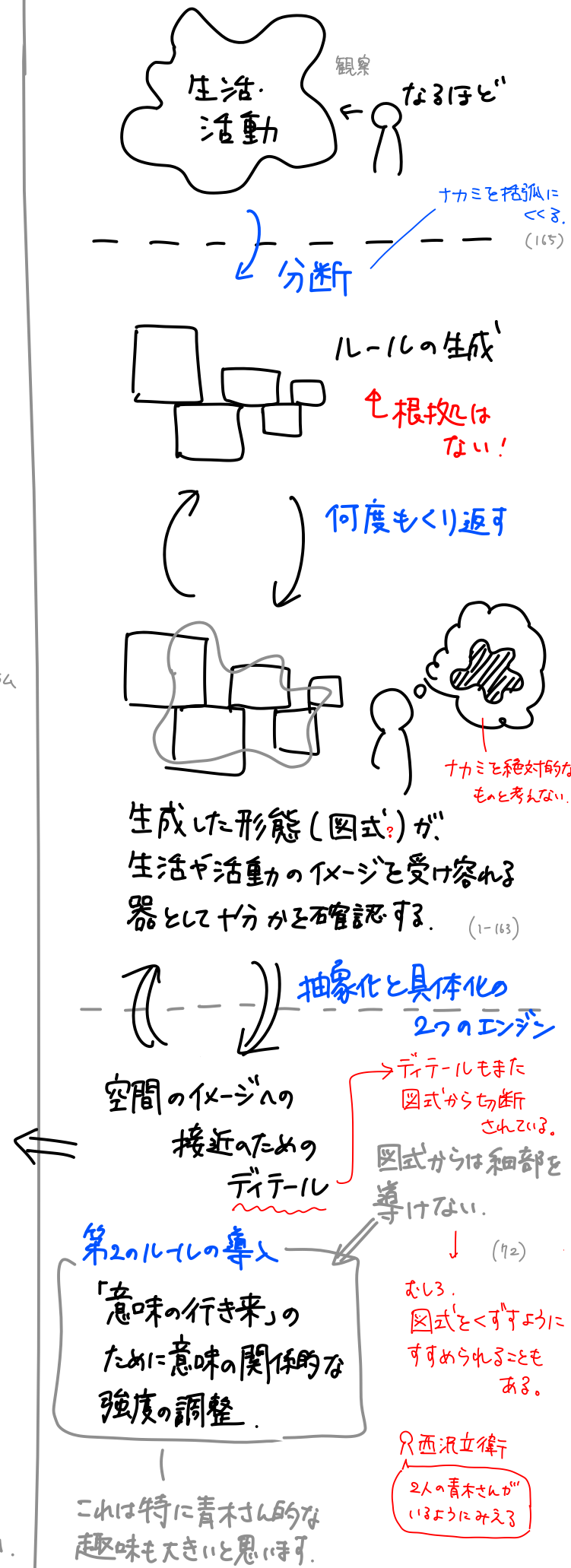
「建築とは、ある特定の世界を、ぼくたちの現実世界の中に現実の物質や空間によって定着することだ。図式はそのための手段にすぎない。そして、そのための手段は何も図式に限らない。」 (50)

近代計画的なプロセス



具体と抽象が接近しているほど「わかりやすく」写真にも撮りやすい。が、青木さんのは撮りにくい。

青木淳の設計プロセス

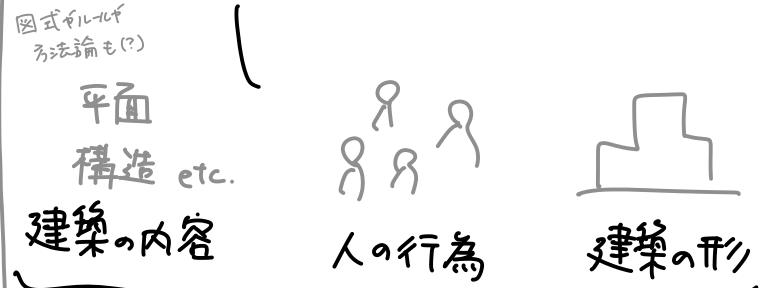


これは特に青木さんの趣味も大きいと思います。

・SANAAのフレキシビリティ

「マルキXティア工房」まで
「建築を計画するということは、現実の混沌とした状況を整理することであり、建築の使いかたや生活をよりポジティブに整理できる方法とその計画ごとに見つけることである。」 (163)

↳ つくり手の主体性・恣意性を、「整理の方法」に徹すること消す。



これらと一致させること。その裏には確たる「十カミ」像がある。この整理方法がないとできない体験 → 新鮮さ

↳ 特異で快刀乱麻のような空間構成

「熊野古道なかへち美術館」以降

↳ 空間構成の特異さが一挙に消滅した (166)

「人の行為と距離をとって、空間の拘束力を弱めるのではない。距離をおいて見たときの人の行為を代入する。」 (167)

↳ 中らぎある不定形な人の行為に対する整理の方法へ

↳ スタッドシアターへ。